

鳴く蟲の話

東京女子高等師範學校助教 平 島 權 藏

涼しさうな、數寄屋か紗の様な薄衣を着けた鳴く蟲の、打振る羽衣の衣擦れによつて起る、金鈴銀鈴の床しい調べの音色には、思はず逍遙者の歩みを止めさせるのである。

是は我邦人の愛好する景物の一つであつて、千數百年の昔から、日本美術の思想と共に、文學の生命となつたのである。實に日本文學、殊に其詩歌は『鳴く蟲』によつて成り立つたと言ふても過言ではあるまい。日本人は『鳴く蟲』によつて、吾々の想像し得ない美的生涯を送りつゝあるのである。然し同じく鳴く蟲と言つても、蟬の聲は昔から蛙聲蟬噪など言て噪がしいものとして厭はれて居るが、然し蛙の類でも『カジカ』などは人に愛玩され、其聲は實に靜かなよい響を持つて居る。が是は元來山間の溪流に棲むもので、こんもりと樹木の生ひかぶさつた溪河の流れに靜な此

聲を聞く時は一層幽邃の情趣を覺えるものである。蟬の聲も噪がしい事は噪がしいが『春蟬』が五月頃に松樹の間に、ジージーと鳴く聲や、炎天の日影も稍々傾いて、夕風の吹き渡る柳に『ヒグラシ』のカンナ カンナ カンナと鳴き立つる時は又捨て難い趣が無いでもない。特に子供に蟬や蜻蛉はつきものである。

然しながら何と言つても、聲を聞いて楽しむのは『籠の蟲』である。鳴く蟲を賞玩する爲蟲屋といふものが出來たのは十七世紀の頃で、當時の俳人其角の日記に

『貞享四年六月十三日の夜、キリギリス賣る翁訪ねむきて四谷より麴町、本郷、湯局、神田等を限なく歩みて夜を明したり』

とある。蟲の音が審美上一の快感として詩家文人に讚美せ

られた事は疑の無い事である。

蟲屋の起源は古い事であろうが、江戸に於ての其起源に就ては、記録を見るに今から、二百五十年前に、越後から出て來て神田邊に一戸を構へ、青物商を營業いんぎょうした忠藏といふ者が、商賣の歸途、蟲に名高い根岸の里を過ぎ、ふと數匹の鈴蟲を捕へ得て持歸り商賣の殘物の胡瓜茄子などを與へて、飼つて置たが、夜になつて微妙の聲を立て、しきりに鳴く、家人は思はぬ音色に惹かされ、一同集つて餘念なく傾聽する中、其音色いつしか四隣に聞えて、誘はれ來るもの次第に多く、店頭いつしか市をなし、其次の夜も次の夜も夜毎に聞手が加はつて店頭の床几も處せまき迄に賑はつた。忠藏は是に力を得て、集めては飼ひ、飼つては育て遂に本業を打すて、『蟲屋の忠藏』と誰知らぬ者も無い『蟲屋』となつた。其後に是が利益の多い商賣だといふ事が諸方に傳つて蟲屋の數も年々共に加はつたといふ事である。

然し前にも述べた、カジカの聲を聞くのが山間の溪流に於て善い様に蟲の音も、自然の儘の野邊の千草の露深き中こそ、實に言得られぬ妙趣の在るものである。私なども毎

年一二度は、井の頭公園の夜を蟲聞に行く。九月中旬にはクツワムシ、スズムシ、マツムシなどがしきりに鳴き立つる。月の夜などは何とも言へぬ趣がある。

古來蟲の名所として文献に見えて居るのは

松蟲

山城の嵐山
攝津の住吉
陸奥の宮城野

鈴蟲

山城の神樂
岡山城の小倉山
伊勢の鈴鹿山
尾張の鳴海

蝨

山城の嵯峨野
山城の竹田の里
大和の龍田山
近江の小野の篠原

都人士は思ひ／＼に其地を訪ねて月下に嘯せう啞ごたる自然の音楽を傾聽した事であろうが、星移り物變り今は銀座街頭車馬雜鬧の邊りに、蟲屋の籠の中から或は又座ながらにして蟲籠の中から、其聲を聞取れるのであるが、少しく足を

運んで、月下の井の頭公園などに「蟲聞き」するのも又忙中の閑ではありますまいか。

昆蟲の音を出す方法には幾通りもあつて打撃に依る打撃音、爆發に依る爆發音などもあるが、美しい音色を出すのは摩擦振動に依る音である。其中でも翅と翅とを擦り合す音に美音が多い。キリギリス、クツワムシ、ウマオヒムシ、コホロギ、スズムシ、マツムシなどは前翅(即ち覆ひ翅)の基部に近い所を摩擦して音を發する、其翅の一方のには、摩擦片ミ他方のには摩擦脈脈(又、鑪狀器)とがある。摩擦片ミいふのは、翅脈の一つが特別の發達をして、硬く皺褶狀になつて居るもので、鑪狀器といふのは翅脈の一つが、發達して其表面即ち摩擦する面に銀貨の縁の様な凸隆部がある。是を兩方摩り合せて出る音が、特異の構造から出來た翅脈又は發音鏡に共鳴して、一層高い強い音ミなる。發音鏡は完全なミ否ミはあるが螽斯科キリギリスのもので鳴く蟲には皆是を認める(キリギリス、ウマオヒ、クツワムシ)、又蟋蟀科コホロギのものには、前翅の外縁が體の側部に屈折して居るのミ發音の場所即ち摩擦片から放射狀に複雑な翅脈が排列

され、更に是から細い翅脈が出て共鳴する様に出來て居る(コホロギ、スズムシ、マツムシ、カンタン等)の以上をヅキオリンに比べて考へるミ鑪狀器は丁度弓狀、然して此絲が馬の尾から出來て顯微鏡的の節のある様には是にも節(銀貨の縁の様な)があり、摩擦片は絲に、而して發音鏡が胴に相當する様に自然の考と人間の考ミが一致したのであらう。

是は飛行機が鳥の眞似をしたり、烏賊軍艦が(歐洲大戰に用ひられた黒烟を吐いて艦體を包み敵に所在を認めさせず、隨て其射撃を免れた)烏賊の眞似をしたり、昆蟲の保護色を眞似て軍服をカーキ色にしたのミは違ふ様である。

何故ならば、胡弓や、ヅキオリンは顯微鏡よりは前から出來て居たからである。唯一つ注意すべき事は前翅を摩り合す際に、スズムシの様に右翅を上にするものには右翅の裏面に鑪狀器があり、キリギリス、クツワムシの様に右翅を下にして摩り合す類のものには左翅の裏に鑪狀器のある事である。

然して是等の翅を摩り合す時の其振動数は音色に關係する事勿論で、蜂は毎秒四百四十の翅振動をなし、蠅は三百五十二の振動をなしてブーンブーンといふ彼の音を發するのであると、吾々の愛玩する種々の鳴く蟲の振動音の翅の振動数を數へるに面白と思ふが、まだ其機會を得ずに居る。

さて是等鳴く蟲の音を發するのは何の爲かといふに、其は皆雌雄關係で、雄が美音を發して雌を歡ばせ、是を引きつける爲である。其れ故に蟬でも是等鳴く蟲即ち籠の蟲でも鳴くのは皆雄である。鳴く蟲の鑑別は其腹部の體末にある産卵管といふ突起の有無で知れる。是のあるのは雌で無いのは雄である。

次に鳴く蟲の飼ひ方であるが籠の蟲といふ通り、何れも籠に飼ふものと思ふのは間違で、蟲夫れづの自然の生活の状態に適した様にしてやるのが必要である。カジカを飼ふのに岩を入れ少し暗い金網を伏せて、水を毎日代へ彼れが故郷の溪流と同じ状態にしてやるのも此理屈である。て鳴く蟲には種類も多いので飼ひ方も種々ある可き筈であるが、大體でいふと、叢間の土上に生活するスズムシ、マツ

ムシ、コホロギの様なもの、草の葉の上に止まつて生活するもの、二つに分ける事が出来る。前者の多くは土色又は是に近い色、後者は綠色又は是に近い色のが多い。此草の葉に止まつて生活する様なのは籠が適當で、土上に生活するものは蓋か硝子鉢に土を入れて其に小さい草なごを植ゑつけ彼の故郷の状態にして置くに喜んで生活しよい音を出すのである。

又斯様にして飼て置く間に述べた雄が雌を歡ばす爲に鳴くといふ事を實驗するに實に可憐なものである。例へば、スズムシ、コホロギの様なもの、雌、雄、同じ器に入れて置くに雄がセツと雌を探して是に出會ふと初め觸角で觸つて是を知り確めて置いて直ぐ向き直つて雌に後を向け翅を立て、得意になつて是を振り立て、妙音を出す。此後を向ける事は、翅の下方即ち後方で音を出すのであるから是をよく聞かすには後を向ける方が善いのである。然して折々後肢で雌が居るか否かを確める爲に觸つて見る。若し觸り得ないで其居ない事が明かると翅を下して更に其行方を探し歩く、實に可憐なものではありませんか。(了)